
そばにいる

幸田もえ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
そばにいる

【Nコード】
N1034A

【作者名】
幸田もえ

【あらすじ】
舞子と美弥は違う。たとえ同じ人間だとしても・・・。

第二話：舞子

「おい」

声をかけてきたのは「まー」こと前田まこと。同じバスケットボールクラブに所属している。

彼は学年トップのバスケの実力者なのだ。背も高く、顔も美形な為、かなり好印象である。

まことを追いかけてバスケットクラブにはいった人も少なくない。

江藤舞子もその一人。今日も「まーくん、どこにいるかしてるー」と追っている。

逃げ身のまことはちょっぴりプレイボーイで、いつもは明るい。

「みーちゃん、助けてーえ」

実は美弥もこのまことが好きだったりする。

だからまことと話すときは、上目遣い、にっこり笑顔を忘れない。

遅れたが、江藤舞子は雑誌「like!」の読者モデル人気ナンバー1である。

通称「まいちゃん」。ウィンクしたときの長いまつげと、長い足が羨ましい。

クールな顔もキュートな顔もこなす表情の豊かさが驚き。

全てにおいて一回り上の存在なんだ、と自覚さえもしている。

第二話：舞子（後書き）

大好きっておもつ気持ちと>br<友達のほうが大事って、どっちが素晴らしい？

第二話：友達

「飯塚さん？」

軽く微笑んで美弥に声をかけた。その顔は、光の逆光で見えにくかったが、舞子に違いなかった。

美弥は返事に困った。初めてと言ってもおかしくない。舞子から声をかけられたのは。

返事をせずに表情だけで「なんですか」という顔をして見せた。舞子は困ったような顔をしていた。

「・・・頼みがあるの。」

どうせまたまことがどうのこうのだって言いたいんであろう。美弥は飽き飽きして、とりあえず

「いいわ。何かしら」

と少し上の立場から返事を出した。舞子は可愛い顔をしているから、とてもことわる気にはならないのであった。

「あたしと・・・友達になってくれないかしら」

これには驚いた。何を言うのかと。でもこんな可愛い友達がいたら、嬉しい・・・。

「私には友達がいないのよ。いつも誘っただけど、『えー、あなたには男がいるんでしょー！』とか『ひがんでるって思ってるん

でしょ』とか言われるんだ……。でもそんなつもりないし」

そのあと彼女は少し黙った。やっぱり顔はかわいい。

「いいよ……。友達って言うのはね、なってるって言うものじゃないくて、自然となれていくんだよ。

だからそんなの気にしなくて良いと思う。やっぱりこれはちょっと大人っぽすぎ……？」

笑顔でそういうと、彼女の目からは涙がこぼれた。

こちらまでうれしくなりそうな素晴らしい笑顔。微笑ましい。

やっぱりなってよかった。美弥はおもった。

第三話：素質

部活の後、美弥と舞子は遊びに行くことにした。舞子は可愛い格好が似合う。そしてファッションにも敏感だ。今日のスタイルはピンクのキャミソールにジャンパーをはおり、半ズボンにカラフルなボーダーのハイソックスをルーズにはいている。

「可愛いね。」

まるで彼氏と彼女のようなやりとりであった。

そこで本当に彼氏でもできないかと美弥はおもった。

と、その時。背後から低い男の声がした。聞き慣れた声だったが、背後ではわからない。

ふりかえると、そこにはまこととその友達の姿があった。

「よ、2人でなにしてるの。もう4時だよ。帰りなって、危ない」

心配性過ぎる。4時で帰れなんて、親よりひどい。

隣にいる男子・・・よく見れば一番格好良いと言われている『日比谷 純』のすがたがあるではないか。少々上目遣いの舞子を見ると、2人の視線は舞子にあるように感じられた。

「こんにちは、まーと、日比谷さん」

美弥は引き気味にいった。純は吹き出すと、ぽんぽんと美弥の頭の上に手をおいた。

何か恥ずかしいことをしたのではないかと緊張した美弥。しかし次の瞬間、かなり驚いた。

「俺のことは『じゅん』でいいよーん」

「あーだめ。だったら俺のことも『まこと』って呼んで」

別にどっちでもいいじゃないとなくさめてやりたくなった。

でも2人とも可愛かったから、希望通り、じゅんとまことって呼んで上げることにした。

第四話：裏口

制服を見るたびに、まことの事をおもいだす美弥はつと気がついたときは5分は経っている。

月曜日、あくびをしながら登校。珍しく裏口から入ってみたくなつた。

ぽつんと立っている木を眺めながら、ぽつんとあるく美弥のすがた。誰も見ていないのの良いことに、美弥はゆっくり歩いた。

「あつれー？みーちゃんだー、だよなー、純。」

この声の主はもちろんまこと。ドキつとした。というか、疑問をもつた。

どうしてここを通ってるの？という、たかが、といったらいいか、素朴な疑問を。

「あ、お、おはよう。じゅんと、まーじゃなくてまこと。」

まことはにっつと笑うと「よろしい」とあたまをぐりぐりとなでた。

「ねえ、じゅん・・・？じゅんはだれが好き！！って思う人いないの？」

歩きながらふと質問した。純は、ふつと黙って、急に笑顔をつくった。

美弥の方を見ながら、どんどん口元が緩んでいく。

「みーちゃんに決まってるじゃーん！」

恐ろしいばかりににやりと笑う。まことも負けじと、

「俺も俺もー！おれもみーちゃんだもんねー」

この姿を舞子にみせたらどうなるだろうか。恋愛と友情、どちらを優先すべきか。

舞子もまことも純も、大変な存在であり、優先すべきかせぬべきかは決めがたい。

「ねーねー、みーちゃん、どっちだよ」

美弥は口を揃えていったまこと達のことを、本気にしてしまうところだった。

今のところ、まことなのだけんど・・。

第五話：正夢

授業中も上の空。

「眠いよー先生、どーすればいいですかー」

彼女は桜井明美。このクラスの担任の先生である。
とてもフレンドリーで、優しく面白い先生だ。

「えー、眠いのー。人って言う字を三回書いて飲み込むといいわよー」

「何嘘ついてんのー、ばればれー」

つつこみやくはいつもまこと。背が高くて、先生よりも大きいのだ。

「あいかわらず大迫力ねー！あっぱれよ前田君！」

脳天気にもほどがあると美弥は思った。そんな先生は、結婚している。

そもそも、彼女は可愛くて、ほっそりしていて女らしい為、告白は少なくなかった。

生徒にも相談したこともあった。

「予鈴なっ！ー！おしまい、きりーつ、れーい、さよーならー！」

さっさと用意して帰ろうとまことは席をたった。

ついでにこうと美弥もたつと、手紙がぽろりと落ちた。

「放課後、裏庭にきてください、話があります 前田まこと」
こついうかしこまったのはすきじゃないはずだ、まことは・・・。
どうしたんだろう。逆に心配になってしまった。

「ばーか、だまされんなよ、俺はそーゆーの嫌いな。

俺は、やっぱりオマエがすきなのもかもしれない。返事は又今度でいいよ。」

そう裏に書いてあった。ほつとした美弥だったが・・・。

「えー！好きかもしれないって・・・。うそでしょー？」

たしかにまことのことは好きだけど、でも・・・。うれしさと不安でいっぱいだった。

はっ

目覚めると、そこは学校。もうすっかり夕日が降りている。

「夢かあ」

ガラガラガラガラ・・・。振り返るとまことの姿が。
驚いた様な表情をした。

「おきたの？」

「うん、寝てたの？」

そこから会話は続かなくて、2人でかえった。

第六話：急速

次の土曜日は、女バスの試合だ。今は練習で精一杯。ホイッスルの音と共に、ドリブルの音が地に響く。

「飯塚っ、頼んだ」

バスはそんなに多くないが、「縁の下のシュート王」とかつていられていた。

バスケットは7歳からはじめ、今まで6年間、毎日ボールを触り続けている。

バスケット経験のない人からみれば、かなり不思議であるだろう。ラインクロスやファールも、ほぼ無い。プレイの仕方が遅いのかも知れない。

「違反女王」と言われる栄 松美、通称まつは、美弥に敵意があるらしい。

しかしそんなことをものともせず、1人黙々とプレイする舞子は、女子の憧れの的。

「もうすぐ女バス試合でしょ。頑張ってね」

男バスの選手達は次々と帰っていく。見物客かと怒りたくなったが、応援に支えられた。

「うん、応援有り難う。明日は男バスでしょ。絶対みにいくからね。」

舞子は上目遣いで男バスの先輩を見ている。それも格好いいひとばかり。

でもそんなふうな仕草できることが、美弥にとってあこがれだった。舞子といい、純といい、どうして美弥の友達はこういう美形ばかりなんだ、と美弥はつくづく思うのであった。

「あれ？まいちゃん。今日まこといなくないか？」

舞子はさがす仕草をして、ほんとだ、と目を合わせた。まことに電話してみると、驚きの一言が返ってきたのだ。

「俺バスケやめるから、よろしくコーチに言つといて。みーちゃん、江藤、ごめんね。俺さ、続けていく気がないんだよね。『オマエみたいになちよこ、やめちまえ』ってしかってでもしてくれないかな……。俺なんていなくても同じだよ、みーちゃん。」

第七話：電話

「なんでそういうこというんだよ、ばか。オマエがいなかったら女バスのみんなも、男バスのみんなも、どんっなに悲しむか、目に見えるだろ？なんで急にやめるとか言うんだよ。だったらあたしもまいちゃんも、純も、まつも、みんなやめるよ。きつとそれくらい簡単だよ。みんな大好きなんだよ、まーが。」

「なんかよく分からないけど、きつとそうよ。あたしもまーくん追いかけてきたけど、美弥と友達になって、いかにまーくん思いかわかってきたのよ。どうして、そこで諦めたりするの。美弥の気持ちもわからずに……。見損なっただわ」

そこまでいうか、というほど舞子も美弥もたつぷり愚痴をこぼした。多分電話の向こうでは、

まことは涙をこぼしていると思う。そして、今しばらく声をかけない方がいいと言うことを学んだ。

「へー。そういうのなら良いよ、とことんオマエしばきにいつたる。」

美弥は、大阪出身なので興奮すると大阪弁をしゃべるのだ。

そんな美弥の目にも、涙が浮かんでいることを、舞子は察知した。そこで、舞子と電話を代わることにした。

「まーくん……。馬鹿っ。バカバカバカバカっ。なんでオマエなんか好きになっただらう。」

今はすっごーい不思議なんだけど……。？フッフ……。馬鹿なのはあたしだよー……。

まーくん、いや前田、どうしてオマエが好きだったのかが、解らねえな・。・」

間をおいて、最後に凄まじく、鋭い言葉を残した。

「さ・よ・な・ら」

言い切ったときの舞子は、涙目だった。

そしてその2日後、やっとワケを聞き出せたのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1034a/>

そばにいる

2010年12月31日02時19分発行